

序 章

テクニカル・ライティングの 目的は伝えることではなく、 説得すること

Technical Writing

テクニカルコミュニケーション（＝テクニカル・ライティング）でもっとも重要なことは、単に「伝える」という目的というより、本質的に「説得する」という目的にあることである。そのため書く技術としての「書くレトリック」がどうしても必要である。

従来のテクニカル・ライティングの教本では、技術・ビジネス文書がもつ「伝える」「説得する」という2つの目的を明確に区別していない。そのため「書き手」である企業の研究者、技術者（設計者、生産技術者、QC技術者、セールスエンジニアなど）、あるいは管理者、経営者は社内のみならず、「読み手」である他の客先や一般消費者との間でコミュニケーション不良による重大な問題を引き起こすといったことを繰り返してきた。

技術・ビジネス文書は単に「伝える」という目的のみではなく、製品のセールスにおいても、また製品安全の周知という局面においても実際に読み手を効果的に説得することができなければ意味がないのである。そのため、いかなる研究者、技術者もテクニカル・ライティングの「説得する」という目的を明確に認識し、そのための技術、すなわち本書で紹介する「書くレトリック」を最重要課題として習得および洗練していかなければならない。

そこで本章では、まず「読み手を説得するには書く技術が必要だ」、次に「書くレトリックとは」、そして「研究者、技術者こそ書くレトリックが必須」について説明しておこう。

1. 読み手を説得するには書く技術が必要だ

テクニカル・ライティングは、文学以外のすべての文書を書く上で必須の基本技術であることが、わが国ではいまだ十分に認知されているとは言い難い状況にあるが、欧米では技術・ビジネス文書を効果的、効率的に書くための技術として当たり前になっている。

欧米とこのこうしたギャップには理由がある。わが国の英語学習の方法は、「専門用語（科学技術用語、熟語、言い回し）」や「英文法」を中心とした、いわゆる「スクール英語」（記憶力中心）の延長で、グローバルに通用するコミュニケー

ション技術からはほど遠いものであるからだ。これではグローバルで生き残る英文ドキュメントを作成することは困難であり、特にこれからの世界に伍して勝ち抜いていくべき研究者、技術者（設計者、生産技術者、QC 技術者、セールスエンジニアなど）および管理者は、武器を持たずに世界の中で戦っているようなものである。そこで、研究者、技術者および管理者はテクニカル・ライティングに必須である書く技術としての「書くレトリック」（=武器）を必ずものにして（マスターして）いつでも使えるようにしておかねばならない。

2. 書くレトリックとは

「書くレトリック」とは何であるか、最初にその全体像を概念図で示しておこう（**図参照**）。

この図で示すように、「書くレトリック」は、テクニカル・ライティングの中心に据えるべき技術であり、コミュニケーションの要としての“約束事項（プロト

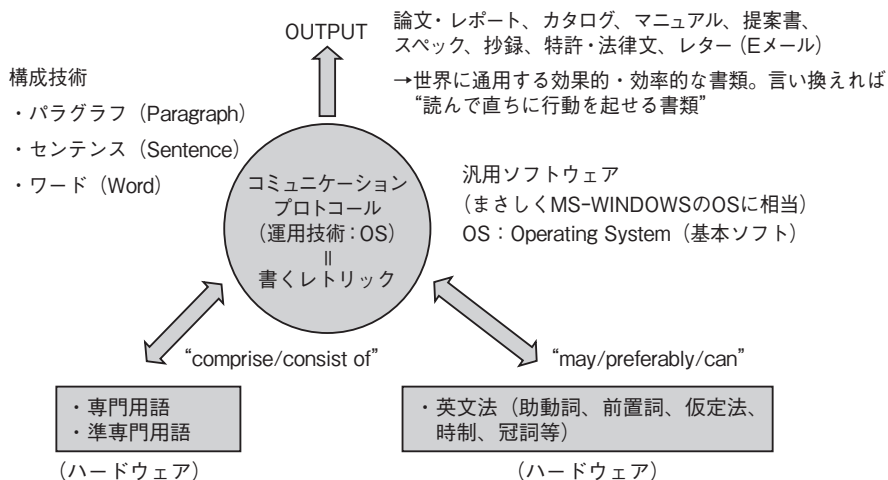


図 コミュニケーション運用技術（書く技術）としての「書くレトリック」の概念図

コール)”にあたる。より詳しくは、「専門用語」「センテンス」「パラグラフ」および「文法」をどのように選択あるいは構成して、どのように効果的・効率的に文書を作り出す（展開していく）かを決める重要な技術である。時には「文法」が正しくてもあえて「書くレトリック」により文を修正することがある。言うなれば「書くレトリック」は文の構成要素をコントロールするソフトウェアといえる。しかも非常に汎用度が高く、文学以外のあらゆる技術文書、ビジネス文書、一般文書をコントロールする。パソコンでいえば、まさに MS-WINDOWS の OS (Operating System：基本ソフト) に相当するものであると筆者は考えている。

ここで「専門用語」「英文法」は「ハードウェア」にあたると言える。これらは文章を作る前からすでに「形のある具体物」（本、辞書、DVD等）として提供されているからだ。ソフトウェア (OS) である「書くレトリック」は、ハードウェアである専門用語、英文法の用法をコントロールする。

すなわち、複数の専門用語のうちからどれを採用するか、たとえば「構成される」という意味合いを英文で表現する場合、「comprise」か「consist of」のどれを使用するかは「書くレトリック」により決定される。また英文法においても、ある事象について表現する際、「may (してもよい)」なのか「preferably (好ましくは)」なのか、それとも「can (できる)」のうちどれを使用するかは「書くレトリック」がコントロールするということである。ちなみにこの「書くレトリック」による文書表現のコントロールは、今のところ人間しかできないが、今後、条件（読み手は誰か、ドキュメントの種類、使用するレトリックのパターンなど）さえ入力すればビッグデータ（専門用語、熟語、言い回し [コーパス]、約束事項）と、人工知能 (AI) を利用して、自動的に「世界に通用する効果的、効率的な書類」（論文・レポート、カタログ、マニュアル、提案書、スペック、抄録、特許・法律文、レター、Eメール）をアウトプットすることができるようになるだろう。

「書くレトリックとは一体、何か？」と問われても読者諸氏は、すぐにはイメージしにくいかもしれない。そこで筆者は、「焼き鳥の串」のようなものだ

考えれば理解しやすいのではないかと考えている。すなわち、「焼き鳥」は、どんなにおいしい材料（鳥の部分、ねぎなど＝書く材料）があっても、そのままでは十分に活かすことができない。

しかし、“串”があることによって、

- (1) 焼きやすくなり（→文が書きやすくなる）
- (2) 食べやすくなり（→文が読みやすく、理解しやすくなる）
- (3) おいしく食べられるようになる（→文が効果的、効率的に伝わり、読み手に、書き手の期待通りの行動を起こさせる）

つまり、どんなにおいしい材料であっても、バラバラに焼いたものをそのまま食べるよりは、串で料理されたものの方が圧倒的においしい。逆に言えば、いくら材料が良くても（→良い内容でも）それぞれがばらばらであれば、おいしい料理（→効果的なドキュメント）にはならない。その意味で「書くレトリック（＝焼き鳥の串の役割）」は、文書の成否を握る非常に重要な役割を担っていると言える。

なお、欧米ではテクニカル・ライティングにおけるレトリック（＝書くレトリック）の重要な役割について、Michael Davis (Illinois Institute of Technology) は、“Science and Engineering Ethics 5” (October 1999, pp. 463-478) の中で以下のように述べている。

「科学技術分野以外の多くの人達、特に社会学者および修辞学者はレトリック、すなわち“説得の技術”はテクニカルコミュニケーション（テクニカル・ライティング）の重要な部分であると主張している。しかし、この主張はよく考えないとそのままでは正しくない。というのは、もし“説得”が純粋に“効果的なコミュニケーション”を意味するのであれば、その場合はもちろん書くレトリックはテクニカル・ライティングの重要な部分と言える。しかし、“説得”がその伝統的な意味（歓心を買うための特殊技術：美辞麗句）のようなものであれば、書くレトリックはテクニカル・ライティングの重要な部分ではなくな

る。この場合、テクニカル・ライティングにおけるそのような書くレトリックの使用は倫理に反することになってしまう。」

筆者は今までテクニカル・ライティングにおける書くレトリックの使用を一貫して力説してきているが、このコメントにあるように、テクニカル・ライティングにおいて非常に「効果的」な手法として書くレトリックが使用されるのはよいが、それが証拠のない恣意的使用あるいは美辞麗句であるようなものであるならば、全く倫理に反し、信用失つ、ひいては仕事を失うことになるということを、研究者、技術者（設計者、生産技術者、QC 技術者、セールスエンジニア）および管理者は肝に銘じておかねばならないことを特に言っておきたい。

3. 研究者、技術者こそ書くレトリックが必須

筆者はこれまで、自身が勤務する大学での講義や公開セミナーでのテクニカル・ライティング講座、および著作物を通じて書くレトリックは研究者、技術者こそ、必須の技術であることを繰り返し主張してきた。あるときこの主張を補強してくれる本に出くわし、「わが意を得たり」という心境になったことを今でも鮮明に覚えている。その本とは GMI Engineering and Management Institute の Dorothy A. Winsor の著書 “Writing Like Engineer, A Rhetorical Education” (Lawrence Erlbaum Associates, Inc. 1996, p3.) である。

Winsor はこの本の中で、従来のレトリックの概念がいかに研究者、技術者の知的コミュニケーションを制限してきたか、^{ひるがえ}翻って、いかに研究者、技術者にとってレトリックを正しく駆使することが重要であるかを指摘している。以下その要点を紹介しておこう。

- ・まずレトリックはエンジニアリングに必要不可欠であること。(Rhetoric is essential to engineering.)

- ・レトリックは歴史的に政治の世界において発展してきたことから、目的は研究・技術活動とは非常に異なること。
- ・レトリックは伝統的に「説得方法」と「説得する対象者（読み手）」に関係してきたこと。
- ・政治的発言はレトリックのパターンで言えば「説得法」に該当するが、進捗レポートやテストレポート（＝技術レポート）は「記述法」と通常みなされる。
- ・しかしビジネスを目的とした技術レポートは説得法（説得文のレトリックのパターン [p. 118-p. 147 参照]）を使用すべきであること。
- ・というのは技術レポートは、現状の考え方や方法に対する改善を促し、最終的に何かを変えることを目的として書かれる。つまり書き手は、その読み手を説得しなければならないことから、まぎれもなく説得文のレトリックのパターンとみなすことができる。

すなわち研究者、技術者が意志決定者（上司、クライアント、編集者）を「説得」するからこそ、物事が変化し発展するのである。単に伝えるだけでは発展しない。このことから、**研究者、技術者こそ書くレトリックが必須である**ことが理解できるだろう。

さらに、このことは筆者がミシガン大学でテクニカルコミュニケーション（テクニカル・ライティング）を学んだときに教わった、J. C. Mathes 教授の以下のコメントからも容易にうなずける。

「テクニカルコミュニケーション（テクニカル・ライティング）でもっとも重要なことは、単に伝えるという目的というより、本質的に説得するという目的にある。しかも、テクニカルコミュニケーションの議論はこれら2つの目的をほとんど明確に区別していない。そのため、テクニカルコミュニケーションの書き手に、これら2つの書く目的を自覚させることができていない。研究者、技術者、管理者、経営者やその他の専門家が彼ら自身のテクニカルコミュニケー